

IBM Cognos TM1
バージョン 10.2.0

Operations Console ガイド

IBM

ご注意

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、35 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は IBM Cognos TM1 バージョン 10.2.0 に適用されるものであり、後続のリリースにも適用される可能性があります。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Cognos TM1
Version 10.2.0
Operations Console Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2013.6

Licensed Materials - Property of IBM

© Copyright IBM Corporation 2012, 2013.

目次

はじめに	v
TM1 クライアントの区別	vii
エンド・ユーザー・クライアント	vii
管理クライアント	viii
第 1 章 新機能	1
Cognos TM1 Operations Console バージョン 10.2.0 の新機能	1
新しい URL	1
追加されたデフォルト・グループ	1
コンソール・ウィンドウ	1
持続するモニター状態	1
ログに記録される追加のイベント	1
サーバーの状態に基づいた E メール・アラートの送信に使用される Watchdog	2
Cognos TM1 Applications Server に対してスケジュールされた自動ログイン	2
サーバー・スケジュールの共有	2
パフォーマンス統計の開始	2
「ディスクにログ記録」を使用した簡易自動ログ	2
第 2 章 提供された Apache Tomcat Web サーバー・ソフトウェアを使用した Cognos TM1 Operations Console のインストール	3
Cognos Configuration を使用して Cognos TM1 Operations Console を配備する	4
Cognos TM1 Operations Console の設定	4
Cognos TM1 Operations Console の開始およびそれへのログイン	5
第 3 章 Cognos TM1 Operations Console の使用	7
操作グループ、管理ホスト、およびサーバーの追加	7
管理者アクセス権の検査タスク	7
ユーザー名の表示	8
サーバー・ヘルス状況	8
「モニター」タブを使用したサーバーなどのオブジェクトのモニター	9
パフォーマンス統計のモニター	10
TurboIntegrator プロセスのモニター	10
日課のモニター	11
TM1 Operations Console のログ・ファイルの作成と設定	11
ログ・ファイルおよびサーバー数値パラメーターの設定	12
「ログ記録」タブの使用	13
ログの表示	14
csv バージョンのログ・ファイルのダウンロード	14
Cognos TM1 Operations Console 設定ファイルのダウンロードとアップロード	15
Watchdog を使用したサーバー・アクティビティの管理	15
Cognos TM1 Operations Console および Logback を使用する Eメールのアラート	16
Logback を使用するための TM1 Applications .bat ファイルの編集	17
Eメール・アラートのパラメーター	17
Logback サンプル・ファイル	19
Cognos TM1 Operations Console の表示の保存と再ロード	21
Cognos TM1 Application サーバーのモニター	21
TM1 Application サーバーをモニター中の SSL の使用	22
第 4 章 Cognos TM1 Operations Console の高度なインストール	27

別マシンへの Cognos TM1 Operations Console のインストール	27
Apache Tomcat Web アプリケーション・サーバーの独自インストールとの Cognos TM1 Operations Console のインストール	27
JRE ユーザー環境変数の確認	27
JRE 鍵ストアへの証明書の追加	28
Cognos TM1 Operations Console の配備	29
Cognos TM1 Operations Console 用のユーザー・グループの作成	29
Cognos TM1 Operations Console の設定	30
Cognos TM1 Operations Console の開始およびそれへのログイン	31
第 5 章 ユーザー補助機能	33
キーボード・ショートカット	33
IBM とアクセシビリティ	34
特記事項	35
索引	39

はじめに

このマニュアルは、IBM® Cognos® TM1® の使用にあたって参照してください。

このマニュアルは、Cognos TM1 Operations Console のインストール、設定、および使用に必要な情報を提供します。Cognos TM1 Operations Console は、Cognos TM1 サーバーのアクティビティをモニターするために使用されるオプションのソフトウェア・コンポーネントです。

対象読者

このガイドを使用するには、次の項目を理解している必要があります。

- インストール・タスク
- Web サーバー・ソフトウェア
- Java™ Runtime Environment (JRE)
- Cognos TM1 サーバーの操作

情報の検索

Web 上で IBM Cognos 製品資料 (すべての翻訳資料を含む) を参照するには、IBM Cognos インフォメーション・センター (<http://pic.dhe.ibm.com/infocenter/cogic/v1r0m0/index.jsp>) にアクセスしてください。リリース・Notes®はインフォメーション・センターに直接公開されます。これには、最新の技術情報と APAR へのリンクが含まれます。

ユーザー補助機能

ユーザー補助機能は、動作が制限されている方、または視力の限られた方など、身体の不自由な方に情報技術製品をご使用いただけるように支援します。本製品にはユーザー補助機能が含まれています。ユーザー補助機能については、33 ページの『第 5 章 ユーザー補助機能』を参照してください。

サンプルに関する免責事項

Samples Outdoors 社、GO 営業、Great Outdoors 名の変形、および Planning サンプルは、IBM および IBM 顧客のサンプル・アプリケーションを開発するために使用されたサンプル・データの架空の企業運営を表しています。これらの架空データには、販売取引、商品流通、財務、および人事のサンプル・データが含まれます。実際の名前、住所、電話番号、または取引額との類似は偶発的なものです。また、サンプル・ファイルの中には、手動またはコンピューターで生成された架空のデータ、学術的ソースまたは公共のソースを基に編集された実際のデータ、著作権所有者の許可を得て使われているデータなどが、サンプル・アプリケーションを開発するためのサンプル・データとして使用されている場合もあります。参照される製品名は、それぞれの所有者の商標である可能性があります。無断の複写は禁止されています。

将来予想に関する記述

このマニュアルでは、本製品の現在の機能について説明しています。一部の内容で、現在利用できない項目について言及している可能性があります。これは、将来利用できるようになることを意味するものではありません。そのような内容は、資料、コード、または機能の提供に向けた取り組み、確約、あるいは法律上の義務を意味するものではありません。機能の開発、リリース、時期や機能性は IBM の独自の決定によるものとします。

TM1 クライアントの区別

IBM Cognos TM1 には、開発者/管理者とエンド・ユーザーの両方のための複数のクライアントが用意されています。これらのクライアントについて、またそれらの違いについて理解することで、最もニーズに合ったクライアントを選ぶことができます。

すべてのクライアントは IBM Cognos TM1 の資料で詳しく説明されています。

- 「*Cognos TM1 Performance Modeler ユーザー・ガイド*」では、Cognos TM1 Performance Modeler の開発機能および管理機能について説明しています。
- 「*Cognos TM1 開発者ガイド*」では、Cognos TM1 Architect および Cognos TM1 Perspectives の開発機能および管理機能について説明しています。
- 「*Cognos TM1 Operations Console ガイド*」では、Cognos TM1 Operations Console を使用して、サーバーをモニターおよび管理する方法について説明しています。
- 「*Cognos TM1 ユーザー・ガイド*」では、Cognos TM1 Architect および Cognos TM1 Perspectives のエンド・ユーザー分析機能について説明しています。
- 「*Cognos Insight ユーザー・ガイド*」では、Cognos Insight のエンド・ユーザー分析機能について説明しています。
- 「*Cognos TM1 Web ユーザー・ガイド*」では、Cognos TM1 Web のエンド・ユーザー分析機能について説明しています。
- 「*Cognos TM1 Applications ガイド*」では、Cognos TM1 Application Web のエンド・ユーザー分析機能について説明しています。

エンド・ユーザー・クライアント

IBM Cognos TM1 データと対話するために、いくつかのエンド・ユーザー・クライアントが利用可能です。

IBM Cognos Insight

IBM Cognos Insight は、TM1 Application Web のクライアントでもあり、さらにあらゆるデータのセットを分析するために使用できる、個人用の分析ツールでもあります。Cognos TM1 Application Web との関連で、Cognos Insight はローカルにセットアップされる、またはリモートのダウンロードとして提供される完全なクライアント・アプリケーションです。Cognos TM1 Application Web のクライアントとして使用する場合は、Cognos Insight を 2 つのモード、接続モードと非接続モードのいずれかで使用できます。

接続モードは、Cognos TM1 サーバーへの同時双方向接続を確立します。TM1 サーバーで更新されたデータは、Insight で再計算を行うと、すべて Insight クライアントで更新されます。これにより、分析を実行する際や計画に貢献する際に、Insight クライアント上のデータが常に最新に保てます。TM1 サーバーへの同時接続が行われる代わりに、非接続モードと比べて、より多くのトラフィックが LAN に生成

され、TM1 サーバーへの負荷が高くなります。接続モードは、TM1 サーバーへの接続が高速でネットワーク遅延の問題を抱えていないユーザーが使用するのが望ましいです。

非接続モードは、現在は子レベル・ノードでのみ使用できます。非接続モードは、ユーザーが作業している Cognos TM1 サーバー・スライス (TM1 モデルおよびデータの一部) をダウンロードしてローカル・コピーを作成します。この方法は、他の接続モードでは TM1 サーバーが保持しなくてはならない負荷を、分散できるという利点があります。このモードでは、処理はクライアントと TM1 サーバーで分散されます。非接続モードは、待ち時間が大きい LAN のユーザーや、TM1 サーバーから地理的に離れた場所にいる ユーザーにとって有益です。ユーザーが Cognos Insight を非接続モードで開くと、TM1 モデル・スライスがダウンロードされてキャッシュされます。データとの対話はすべてローカル・キャッシュに対して行われるため、応答のスピードが飛躍的に上がります。

IBM Cognos TM1 Application Web

IBM Cognos TM1 Application Web はフットプリントのない Web クライアントで、任意のサポートされている Web ブラウザーを使用して Cognos TM1 アプリケーションを開いて作業することができます。Cognos TM1 Application Web ワークフロー・ページからは、ノードを開いたり、所有権を得たり、データを入力したり、計画に貢献したりすることができます。Cognos TM1 Application Web が最も有益なのは、企業のポリシーによってローカル・クライアントのインストールが禁止されている場合や、Microsoft Windows 以外のオペレーティング・システムを使用している場合 (TM1 シック・クライアントはすべて Windows ベースのため) です。

IBM Cognos TM1 Web

IBM Cognos TM1 Web はフットプリントのない Web クライアントで、任意のサポートされている Web ブラウザーで Cognos TM1 データの分析や変更が行えます。Cognos TM1 Web では、ユーザーは Cognos TM1 Application Web ワークフロー・ページにアクセスできません。そのため、TM1 Web では Cognos TM1 アプリケーションに参加できません。

管理クライアント

これらの IBM Cognos TM1 クライアントを使用して、Cognos TM1 のデータやモデルを管理できます。

IBM Cognos TM1 Performance Modeler

IBM Cognos TM1 Performance Modeler は、ディメンション、キューブ、規則、プロセスなどのオブジェクトの作成または生成を容易にする、最新の Cognos TM1 モデル作成ツールです。Performance Modeler は、アプリケーションに必要な規則やフィーダーの生成を自動化して、モデル作成のプロセスを簡単にします。また Performance Modeler では、データおよびメタデータの TM1 サーバーへのインポート処理を簡単にする、ガイド付きインポートを導入しています。Performance Modeler は、すべての新規および既存の Cognos TM1 モデルに対して第一に使用する開発および保守ツールとなります。

IBM Cognos TM1 Architect

IBM Cognos TM1 Architect は、旧式の Cognos TM1 モデル作成ツールで、すべての TM1 オブジェクトの作成と保守をサポートします。TM1 Architect は、自動フッターおよびルール生成をサポートしません。また、ガイド付きインポート機能も付いていません。Architect ユーザーは、すべての TM1 モデルの第一の開発環境として Cognos TM1 Performance Modeler に移行するように推奨されています。

IBM Cognos TM1 Perspectives

IBM Cognos TM1 Perspectives は、TM1 Excel のアドインです。Cognos TM1 Perspectives は、Cognos TM1 のモデル開発と Microsoft Excel 機能を介したデータ分析の両方で使用できる、旧式のツールです。Cognos TM1 Architect と同様に、Perspectives はすべての TM1 オブジェクトの作成および保守をサポートしますが、Performance Modeler の高度な機能はありません。TM1 データの処理時に Excel アドインのインターフェースや、グラフ作成などの Microsoft Excel の機能を使用できる必要があるエンド・ユーザーは、Perspectives を使用できます。それ以外の場合、すべての TM1 モデルについて、管理者は第一の開発環境として Performance Modeler に移行することが推奨されています。

IBM Cognos TM1 Operation Console

IBM Cognos TM1 Operations Console は、Web ベース操作ツールで、Cognos TM1 サーバーのモニター、サポート、および管理を容易にして毎日のサーバー処理についてのより深い洞察を与えられるように設計されています。Cognos TM1 Operations Console を使用すると、指定した時間に複数の TM1 サーバーで実行するスレッドを動的にモニターすることができます。スレッド・アクティビティをソートしたりフィルター処理したりすることができ、またサーバー・アクティビティのログ記録をスケジューリングすることもできます。また Operations Console には、モニター対象の各 TM1 サーバーの現状を診断するヘルス・チェック機能も備わっています。Operations Console は、企業規模の TM1 環境を管理する Cognos TM1 管理者に最適なインターフェースです。

第 1 章 新機能

このセクションでは、このリリースでの新機能、変更された機能、削除された機能についてリストで示します。

この情報は、アップグレードやアプリケーション配布戦略、ユーザー向けの研修要件の計画を作成する上で役立ちます。

最新の製品資料を見つけるには、IBM Cognos TM1 インフォメーション・センター (<http://pic.dhe.ibm.com/infocenter/ctm1/v10r2m0/index.jsp>) にアクセスしてください。

Cognos TM1 Operations Console バージョン 10.2.0 の新機能

Cognos TM1 Operations Console バージョン 10.2.0 には、以下の新機能があります。

新しい URL

Cognos TM1 Operations Console を実行するには、`http://servername:port number/pmhub/pm/opsconsole` を使用します。

追加されたデフォルト・グループ

`admin` というグループがデフォルトで Cognos TM1 Operations Console 設定に定義されています。

このグループは、SDATA サンプル・データベース用のデフォルトのモニター・グループを作成するのに使用されます。

コンソール・ウィンドウ

Cognos TM1 Operations Console に、実行されたアクションと状況メッセージを表示するコンソール・ウィンドウができました。

持続するモニター状態

モニターの状態を保存して再度ロードすることができます。

詳細については、21 ページの『Cognos TM1 Operations Console の表示の保存と再ロード』を参照してください。

ログに記録される追加のイベント

複数のスレッド、オブジェクト競合、日課、およびプロセスをモニターできます。Cognos TM1 Application Server のモニタリングが簡素化されました。

詳しくは、11 ページの『日課のモニター』および 21 ページの『Cognos TM1 Application サーバーのモニター』を参照してください。

サーバーの状態に基づいた E メール・アラートの送信に使用される Watchdog

Watchdog 機能は Cognos TM1 Server 内の特定の状態を識別し、アラートを送信するとともに他のアクションを起動することができます。

Watchdog 機能を使用することにより、Cognos TM1 Server のアクティビティをオフラインでモニターできます。Watchdog を使用するには、サーバーの状態を識別するための基準のセットと修正アクションまたは通知アクションを設定します。

詳細については、15 ページの『Watchdog を使用したサーバー・アクティビティの管理』を参照してください。

Cognos TM1 Applications Server に対してスケジュールされた自動ロギング

Cognos TM1 Server のほかに、Cognos TM1 Applications Server に対してスケジュールされた自動ロギングを生成するように IBM Cognos TM1 Operations Console を設定することができます。

詳細については、21 ページの『Cognos TM1 Application サーバーのモニター』を参照してください。

サーバー・スケジュールの共有

ユーザーは、他のユーザーによって作成されたスケジュールを表示、ダウンロード、およびモニターすることができます。

詳細については、11 ページの『TM1 Operations Console のログ・ファイルの作成と設定』を参照してください。

パフォーマンス統計の開始

パフォーマンス統計をCognos TM1 Operations Console の「モニター」オプションから直接開始できるようになりました。

10 ページの『パフォーマンス統計のモニター』を参照してください。

「ディスクにログ記録」を使用した簡易自動ログ

モニター・ビューに「ディスクにログ記録」オプションが使用可能になりました。

詳細については、11 ページの『TM1 Operations Console のログ・ファイルの作成と設定』を参照してください。

第 2 章 提供された Apache Tomcat Web サーバー・ソフトウェアを使用した Cognos TM1 Operations Console のインストール

IBM Cognos TM1 Operations Console は、Cognos TM1 サーバーのアクティビティをモニターするために使用される Java ベースのオプション・コンポーネントです。

始める前に

Cognos TM1 Operations Console は Cognos TM1 のインストール時にデフォルトでインストールされ、提供された Apache Tomcat Web サーバー・ソフトウェアを使用します。

Cognos TM1 Operations Console をインストールする前に、以下を行います。

- Cognos TM1 前提ソフトウェアがインストールされていることを確認します。
- Cognos TM1 Admin Server、TM1 Application サーバー、モニター対象の Cognos TM1 Server、および TM1 Sdata サーバーがインストールされていて稼働していることを確認します。
- Cognos TM1 Architect を開始でき、モニター対象の Cognos TM1 サーバーに管理者としてログオンできることを確認します。
- すべてのサービスは、単一のドメイン アカウントの下で実行する必要があります。Cognos TM1 インストール ウィザードでは、ドメイン アカウントのパラメーターを設定しますが、インストールを実行する前に、サービスが実行されるアカウントを作成する必要があります。各サービスが異なるアカウントで実行されている場合、それらのサービス間では相互に通信できません。
- Cognos TM1 Operations Console バージョン 10.2.0 を使用して、Cognos TM1 バージョン 9.5.2 サーバーをモニターすることができます。ただし、9.5.2 システム内では 10.2.0 の機能をすべて使用できるわけではないため、基本的なモニタリングのみを実行でき、実行中かまたはオフラインの 9.5.2 サーバーのハートビート状況のみを表示できます。
- アップグレード: 10.2.0 バージョン内の設定、特に共有ログ・スケジュール・ファイルの変更のため、以前のバージョンの Cognos TM1 Operations Console 設定ファイルを 10.2.0 バージョン内で使用することはできません。サーバー・データ、ユーザー設定、およびスケジュール情報を再入力する必要があります。

手順

1. Microsoft Windows Vista、Windows 7、または Windows Server 2008 オペレーティング・システム・ソフトウェアでは、`issetup.exe` コマンドを右クリックしてから「管理者として実行」をクリックします。その他のオペレーティング・システムでは、IBM Cognos TM1 インストール・ディスク上、または Cognos TM1 インストール・ファイルをダウンロードして解凍した場所にある `issetup.exe` ファイルをダブルクリックします。

2. 「Web アプリケーション層」 > 「Cognos TM1 Operations Console」コンポーネントを選択しておきます。

要確認: ASCII 文字だけで構成されるパス名を持つディレクトリーに IBM Cognos TM1 コンポーネントをインストールします。一部の Windows Web サーバーでは、ディレクトリー名に ASCII 以外の文字を使用することができません。

Cognos Configuration を使用して Cognos TM1 Operations Console を配備する

Cognos Configuration で TM1 Applications Server を開始して、TM1 Operations Console の実行に必要な Apache Tomcat を配備します。

始める前に

Microsoft Windows Vista、Windows 7、または Windows 2008 オペレーティング・システム・ソフトウェアを実行するコンピューターで、Program Files (x86) ディレクトリーから製品をインストールする場合は、IBM Cognos Configuration を管理者として開始します。

手順

1. 「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Cognos TM1」 > 「IBM Cognos Configuration」をクリックします。
2. 「TM1 Application Server」を右クリックし、「開始」をクリックします。

このステップによって、Cognos TM1 で提供されているバージョンの Tomcat が開始され、Cognos TM1 Operations Console が自動的に配備されます。

3. 「ファイル」 > 「保存」とクリックして構成データを保存します。
4. 「ファイル」 > 「終了」とクリックして、Cognos Configuration を閉じます。

Cognos TM1 Operations Console の設定

デフォルトでは、Cognos TM1 Operations Console はサンプル管理ホストとして localhost、サーバーとして sdata、および admin というグループを認証に使用するよう設定されていて、すぐに稼働できるようになっています。必要に応じて、これらの設定を編集して認証サーバーをカスタマイズすることができます。

手順

1. `http://servername:port number/pmhub/pm/admin` を入力して設定画面を開きます。
2. モニター用のデフォルトの管理ホスト、サーバー、およびグループを変更するには、「**com.ibm.ba.pm.opsconsole.monitor.tm1.TM1OpsConsoleMonitor**」ノードを展開し、「**com.ibm.ba.pm.opsconsole.monitor.tm1.TM1OpsConsoleMonitor.dictionary**」オプションを選択します。各設定をクリックして、それを変更します。 Cognos

TM1 Operations Console を Microsoft Internet Explorer 8 で使用する場合は、Microsoft Internet Explorer の文書を参照して、次のように設定にしておいてください。

- Web ページにアクセスするごとに最新表示をするオプションを有効にします。
- スクリプト・デバッグのためのオプションは無効にします。

Cognos TM1 Operations Console の開始およびそれへのログイン

IBM Cognos TM1 Operations Console を実行するには、このコンポーネントのポートとサーバー名を識別する URL を入力します。

手順

1. Web ブラウザーで、Web アドレス `http://servername:portnumber/pmhub/pm/opsconsole` を入力します。

説明

- *server_name* は、Cognos TM1 Operations Console および Web アプリケーション・サーバーがインストールされているコンピューターです。Cognos TM1 Application Web を実行している Web サーバーに現在ログオンしている場合、キーワード `localhost` を使用することができます。そうでない場合は、アプリケーションをホスティングする Web サーバーのマシン名、ドメイン名、または IP アドレスを使用できます。
 - *port_number* は、Web アプリケーション・サーバーが稼働しているポート番号です。Cognos TM1 インストールに付属の Apache Tomcat のバージョンの場合、デフォルトのポート番号は 9510 です。別のバージョンの Apache Tomcat の場合、`C:\Program Files\Apache Software Foundation\Tomcat 6.0\conf\` の場所にある Apache Tomcat の `server.xml` ファイルを開いて、ご使用のバージョンの Tomcat が使用するポート設定を判別してください。
2. ログオン・ページで、以下のフィールドに値を入力してから、「**ログオン**」をクリックします。デフォルトのモニター・グループを使用するには、以下を入力します。
 - 管理ホスト: `localhost`
 - サーバー名: `sdata`
 - グループ名: `admin`
 - ユーザー名: `admin`
 - パスワード名: `apple`

Cognos TM1 Operations Console の使用を開始するには、「*IBM Cognos TM1 Operations Console ガイド*」の『IBM Cognos TM1 Operations Console の使用』の章を参照してください。

第 3 章 Cognos TM1 Operations Console の使用



インストール後、Cognos TM1 Operations Console は、**Admin** というモニター・グループを使用して **SData** TM1 Server をモニターするように設定されています。デフォルトを編集することも、独自のモニター・グループを作成することもできます。

IBM Cognos TM1 Operations Console の使用を開始するには、**Development** や **Production** などの論理操作グループをまず追加してください。

操作グループ、管理ホスト、およびサーバーの追加

IBM Cognos TM1 Operations Console をインストールして実行したら、操作グループを追加し、管理ホストとサーバーを指定します。

例えば、"Development"、"Production"、または "Test" として示されるサーバーのグループがあるかもしれません。

1. ツールバーの「操作グループの追加」 をクリックするか、「操作」メニュー  を使用して「操作グループの追加」を選択します。
2. グループの名前を入力します。ここには任意の名前を使用できます。
3. 「作成」をクリックします。
4. 操作グループを右クリックし、「管理ホストの追加」を選択します。
5. 管理ホストの完全修飾名を入力します。デフォルトのセットアップでは localhost が使用されています。
6. 「OK」をクリックします。
7. 先ほど追加した管理ホストを右クリックし、「TM1 Server の追加」を選択します。
8. モニターするサーバーの名前を入力します。デフォルトのセットアップを使用するには、**SData** と入力します。

管理者アクセス権の検査タスク

Cognos TM1 Operations Console で特定の機能を実行するためには、その前に有効な管理者資格情報を入力する必要があります。

手順

1. TM1 Server を右クリックします。
2. 「管理者アクセス権の検査」を選択します。
3. 管理者 ID の有効なユーザー名およびパスワード資格情報を入力します。
4. 「OK」をクリックします。

ユーザー名の表示

MaskUserNameInServerTools パラメーターによって、IBM Cognos TM1 Operations Console 画面でユーザー名を表示するか、マスクを掛けるかを決定します。

Tm1s.cfg で MaskUserNameInServerTools=TRUE が設定されている場合、セキュリティを確保するために、Cognos TM1 Operations Console でユーザー名にマスクが掛けられます。ユーザー名のマスクを解除するには、管理者が Cognos TM1 Operations Console でサーバーを右クリックし、「管理者アクセス権の検査」をクリックして、管理者の状況を確認できます。

このパラメーターはデフォルトで FALSE に設定されています。このパラメーターを明示的に TRUE に設定しないと、Cognos TM1 操作コンソールには、管理者のアクセス権が検証されていない場合でもユーザー名が表示されます。

サーバー・ヘルス状況








「サーバー・ヘルス状況」タブは、Cognos TM1 Operations Console によってモニターされているサーバーの状況をほぼ即時にフィードバックします。

モニター対象のサーバーが、サーバーの現在の状況を表すアイコンと、一部のスレッドとメモリー情報と共にリストされます。

また「ヘルス」タブで Cognos TM1 サーバーをクリックして、そのサーバーの「拡張」状況ウィンドウを開くことができます。「ヘルス」タブで Cognos TM1 アプリケーション・サーバーをクリックすると、Tomcat の統計情報のレポートも表示されます。

以下の状況は、「ヘルス状況」タブにあるアイコンを使用して表示することができます。

表 1. Cognos TM1 Operations Console のヘルス状況アイコン

アイコン	状況
	オンライン。サーバーはオンライン状態です。このサーバーは稼働しています。
	始動中。サーバーは始動中です。
	一括ロード・モードへの切り替え中。サーバーが一括ロード・モードに切り替わります。
	一括ロード・モード。サーバーは一括ロード・モードになっています。
	オフライン。サーバーはオフライン状態/接続できない状態です。このサーバーは稼働していないか、Cognos TM1 Operations Console に接続できていません。
	停止中。サーバーが停止処理中です。
	サポートされていません。Heartbeat はサポートされていません。

「ヘルス状況」タブは、サーバー内のスレッドの数と、ロックが付与されるのを待機しているスレッドの数も表示します。

ヘルス状況は 10 秒ごとに更新されるので、前回のリフレッシュ以降いつサーバー状況が変更されたかに応じて、10 秒以内に情報が表示されます。

レポートにリフレッシュ・レートが含まれる場合、データはそのレポートに指定されているリフレッシュ・レートで更新されます。

「モニター」タブを使用したサーバーなどのオブジェクトのモニター

Cognos TM1 Operations Console の「モニター」タブには、サーバーなどの Cognos TM1 オブジェクトの状況に関する情報が表示されます。「モニター」タブでサーバー・アクティビティを調べるには、まずログをスケジュールします。

手順

1. モニターするサーバーを右クリックします。
2. サーバーの本質的なアクティビティを調べるには、「モニター」 > 「ステータス」 > 「基本」オプションまたは「モニター」「ステータス」「拡張」オプションを選択します。「拡張」オプションはデフォルトでオンになっていて、オブジェクト競合統計が追加されます。

オブジェクトが待機している可能性のある関連プロセスが存在する場合は、その関連プロセスが表示されます。特定のプロセス上にマウス・カーソルを移動させることにより、長いプロセス名を表示できます。

注意: サーバーの負荷が大きいときにこのレポートのデフォルトの拡張バージョンを使用すると、システム・パフォーマンスが最大 10% 低下することがあります。

com.ibm.ba.pm.opsconsole.monitor.OpsConsoleMonitor Performance Management Hub システム設定ファイルの **EnhancedStatusDetail** パラメーターを **false** に設定することにより、どのユーザーもこのレポートの拡張バージョンを実行できないようにすることができます。この値を **false** に設定してもレポートの拡張バージョンは提供されますが、その場合はオブジェクト競合統計列がブランクになります。デフォルトでは、このパラメーターは **true** に設定されているので、拡張バージョンを使用できます。

3. クイック検索フィールドにテキストを入力することにより、ビューにクイック・フィルターを適用できます。
4. 「モニター」表示にフィルターを適用するには、「フィルター」ボタンをクリックします。このフィルターを解除するには、「クリア」をクリックします。「モニター」タブの列上にマウス・カーソルを移動させることで、適用されているフィルターを調べることができます。「モニター」タブで「フィルターをオフ」をクリックして、現在保管されているフィルターの使用を中止して、表示される「フィルター状態」ダイアログ・ボックスで新規の基準セットを選択できます。「フィルター状態」ダイアログ・ボックスでは、「コミット」、「ロールバック」、「待機」などのスレッドの状態に基づいた情報を含めたり削除したりすることができます。「システム」、「日課」、「ユーザー・スレッド」など、具体的なスレッドの種類が表示されるようにすることもできます。このレポートは、マルチスレッド・クエリー実行に関する情報を提供します。

5. TurboIntegrator プロセスまたは日課をモニターするには、「モニター」 > 「プロセス」または「モニター」 > 「日課」をクリックします。

パフォーマンス統計のモニター

Cognos TM1 Operations Console で、サーバーのサーバー・メモリーおよびパフォーマンスの統計をモニターできます。

手順

1. サーバーおよびパフォーマンスの統計の収集を開始するには、サーバーを右クリックして、「パフォーマンス・モニターの起動」を選択します。
2. サーバー・メモリーおよびパフォーマンスの統計ログを表示するには、サーバーを右クリックして、「モニター」 > 「パフォーマンス統計」を選択します。
3. 管理者アクセスであることを確認します。

以下の統計がパフォーマンス統計レポートで利用可能です。

- 表示用に使用されているメモリー
- 計算用に使用されているメモリー
- フィーダー用に使用されているメモリー
- 入力データ用に使用されているメモリー
- 使用されているメモリーの合計

さらに、監視中の各サーバーの状況オプションには、以下の統計が表示されません。

- 使用済みメモリー
- ガーベッジ・メモリー

TurboIntegrator プロセスのモニター

Cognos TM1 Operations Console でサーバーの TurboIntegrator プロセスをモニターできます。

手順

1. パフォーマンス・モニターが開始されていることを確認します。

パフォーマンス・モニターがオンになっていない場合は、デフォルト値または前回の実行から得られた値が表示されます。

パフォーマンス・モニターがオンになっていないときでも、「プロセス」ウィンドウを表示するためには管理者アクセスであることを確認する必要があります。

2. サーバーを右クリックし、「モニター」 > 「プロセス」を選択します。「プロセス」ウィンドウに統計 (プロセス名、現在の状態、完了状況、クライアント名、最終開始時刻、最終終了時刻、最終期間) が表示されます。クライアント名には、特定のプロセスに関連したスレッドに関する情報が含まれます。クライアント名フィールド内の各エントリーは、*Client ID Thread ID* の形式になっています。複数のエントリーはセミコロンで区切られます。

スレッドの起源がクライアントである場合、名前には Admin, 512 などのクライアント名が含まれます (Adminはクライアント名、512 は対応スレッド ID)。

スレッドの起源が日課である場合は、日課名が対応スレッド ID とともに大括弧内に表示されます。

プロセスにスレッドが多数関連しているときは、ノード矢印をクリックすると以下のようなリストが表示されます。

Completion Status :

NORMAL - Process executed normally

UNKNOWN - Process status could not be captured

REJECTED_RECORD - User asked to skip this record and note an error into the log with the ItemReject() TI function

MINOR_ERRORS - Execution finished but had less than the maximum number of minor errors

PROCESS_BREAK - User executed a ProcessBreak() function

ABORTED_BY_PROCESSQUIT - Execution was aborted by a ProcessQuit() TI function

ABORTED_WITH_ERROR - Process was aborted because a serious error occurred

ABORTED_ON_INIT - Process was aborted because of a serious error during the process startup phase.

「プロセス」ウィンドウは、「設定」ウィンドウで「メモリー統計の更新頻度」に指定した時間間隔に基づいて更新されます。

日課のモニター

Cognos TM1 Operations Console でサービス提供の日課をモニターできます。

手順

1. パフォーマンス・モニターを開始していない場合は、サーバーを右クリックし、管理者アクセスであることを確認した後に、サーバーを右クリックして「パフォーマンス・モニターの起動」をクリックします。
2. サーバー上で実行中の日課の統計を見るには、サーバーを右クリックし、「モニター」 > 「日課」をクリックします。日課に関する情報 (日課名、完了状況、現在の状態、クライアント名、最終開始時刻、最終期間 (秒単位)、次回の有効化時刻、現行プロセス) が示されます。

TM1 Operations Console のログ・ファイルの作成と設定

以下の手順に従って、IBM Cognos TM1 Operations Console のログ・ファイルを設定します。

複数の異なるログ記録をスケジュールして、さまざまな種類のサーバー状況を追跡できます。各ユーザーは、手動または自動でスケジュールされた、削除されていない任意のログを所有しています。

Cognos TM1 アプリケーション・サーバーのモニターを行うこともできます。アプリケーション・サーバーの設定には、ログ記録に関する特別なプロパティはありません。自動ログ記録を行うために「ディスクにログ記録」を選択した場合、メッセージをログ記録する頻度は、モニタリング・ウィンドウのデータをリフレッシュする頻度と同じです。Cognos TM1 サーバーの設定とは異なり、Cognos TM1 アプリケーション・サーバーは「ログの追加」をサポートしていません。Cognos TM1 アプリケーション・サーバーのモニターで「ディスクにログ記録」を使用する場合、ログ・ファイルの古いモニタリング・データは新しいログ・コンテンツで上書きされます。

Cognos TM1 アプリケーション・サーバーのログ記録は、スケジュールに入れることもできます。2 つのタイプのアプリケーション・サーバー・データを記録できます。

- アプリケーション・サーバーの統計情報
- アプリケーション・サーバーのセッション情報

ログ記録を使用する際に、Cognos TM1 アプリケーション・サーバーのデータをフィルタリングする機能はありません。

「ディスクにログ記録」オプションは、すべてのモニター・ウィンドウで使用可能です。自動ログを作成するには、「ディスクにログ記録」をクリックします。「ディスクにログ記録」のチェックを外してログ記録をオフにするか、モニター・ウィンドウを閉じるか、Cognos TM1 Operations Console を閉じるまで、データはログ記録され続けます。

ログ・ファイルおよびサーバー数値パラメーターの設定

「設定」オプションを使用して、ログ・ファイルの数値およびその他のサーバー・パラメーターをどのように収集するかを定義する数値パラメーターを設定します。

各ログ・ファイルについて、以下のパラメーターを入力します。

ログの期間

更新データをログ・ファイルに書き込む時間間隔を指定します。

例えば、画面の Refresh が 2 秒に設定されている場合に、LogPeriod を 10 秒に設定すると、5 回の画面表示で出力が一度行われることになり、ファイルに書き込まれるデータ量が減ります。デフォルトは 2 秒です。

ログの追加

デフォルトでは、新規ファイルは追加されません。既存のログを上書きします。true を選択すると、新規ファイルが既存のログに追加されます。

更新期間

デフォルトでは、ログはデータを更新するまで 2 秒間待機します。デフォルトより短いまたは長い更新時間を秒単位で入力します。

許容範囲の要因

デフォルトでは、データは新規 (0) です。ログのデータが持続することを許可するには、新しいポーリングを要求するまでデータが持続できる時間をここに秒単位で入力します。

タイムアウト

デフォルトでは、サーバーへの接続の試行を 2 秒試行した後に終了します。この数値を変更して、ログが試行を終了するまでに試行を続ける時間の長さを調整することができます。

IBM Cognos TM1 Operations Console サーバーがここに指定されている秒数で更新された状況を取得しない場合、タイムアウトが発生したことを示す表示とともに古いデータ (存在する場合) が送信されます。

メモリー統計更新期間

デフォルトでは、ログはデータを更新するまで 2 分間待機します。デフォルトより短いまたは長い更新時間を分単位で入力します。

メモリー統計許容範囲の係数

デフォルトでは、データは新規 (0) です。メモリー統計のデータが持続することを許可するには、新しいポーリングを要求するまでデータが持続できる時間をここに秒単位で入力します。

メモリー統計タイムアウト


デフォルトでは、サーバーへの接続の試行を 2 分試行した後に終了します。この数値を変更して、ログが試行を終了するまでに試行を続ける時間の長さを調整することができます。

IBM Cognos TM1 Operations Console がここに指定されている秒数で更新された状況を取得しない場合、タイムアウトが発生したことを示す表示とともに古いデータ (存在する場合) が送信されます。

「ログ記録」タブの使用

管理者アクセス権を必要とするパフォーマンス統計、プロセス、日課を除くすべてのタイプの 모니터のログをスケジュールできます。

手順

1. ログをスケジュールするには、「**ログ記録**」タブをクリックします。
2. TM1 Server をモニターするには、「**TM1 サーバー**」タブをクリックします。
TM1 Applications サーバーをモニターするには、「**TM1 Application**」タブをクリックします。
3. ログを作成するサーバーにチェック・マークを付けます。「ログのスケジュール」アイコンが見えるようにするために、ウィンドウをドラッグすることが必要な場合もあります。
4. 新規ログを作成するには、「**新規のログのスケジュール**」 をクリックします。
5. ログのパラメーターを以下のように定義します。

ログ・タイプ

ログの種類 (「**ログ記録ステータス**」、「**ログ拡張ステータス**」 (オブジェクト競合列を含む)、「**SandBox のログ記録**」、「**SandBox Queue のログ記録**」) を 1 つ以上選択します。

ログ記録の期間


「**開始日**」、「**開始時刻**」、「**終了日**」、「**停止時間**」、および「**ログ**

記録頻度」(秒単位)を入力します。日付を設定するには、フィールド内をクリックしてカレンダーを開きます。

状態 ログに記録する状態(「アイドル状態」、「実行」、「コミット」、「ロールバック」、「待機」、「ログオン」、または「完了」)にチェック・マークを付けます。

スレッド

ログに記録するスレッドのタイプ(「システム・スレッド」、「日課」、または「ユーザー・スレッド」)にチェック・マークを付けます。

6. 詳細を定義したら、「作成」をクリックします。
7. 「フィルター」ボタンを使用して、画面に表示されるログの数を減らすことができます。
8. 保存後にログ・ファイルのパラメーターを変更するには、 を使用します。

ログの表示

「ログの表示」オプションは、選択されたサーバーに対してスケジュールされたログのリストを表示します。

サーバーをモニターしているユーザーは、他のユーザーによって作成されたすべてのスケジュールを見ることができます。また、ユーザーは、それらのスケジュールに対して、サポートされているすべてのアクションを実行できます。ただし、モニター対象サーバーを所有者が削除した場合、そのスケジュールは削除されて他のユーザーは使用できなくなります。

手動または自動でスケジュールされたログを表示するには、以下のようにします。

手順

1. ログを表示するサーバーを右クリックします。
2. 「ログの表示」を選択します。

タスクの結果

「ログの表示」ダイアログ・ボックスが表示されてすべてのログがリストされます。「ログ・タイプ」は、ログがスケジュールされたものであるか自動であるかを示します。「フィルター」ボタンを使用して、表示を目的の結果のみに制限することができます。「ディスクにログ記録」をクリックすると、このリストに現在の画面のログが追加されます。

csv バージョンのログ・ファイルのダウンロード

csv バージョンのログをダウンロードするには、「ログ・ファイルのダウンロード」オプションを使用します。

手順


1. 目的のサーバーを右クリックし、「ログ・ファイルのダウンロード」を選択します。
2. ダウンロードするログの選択ボタンをクリックします。 現行バージョンの画面では、ログの「ディスクにログ記録」オプションを選択すると、ここにエントリが作成されます。
3. ログをダウンロードすることを確定し、必要に応じて「保存」または「開く」ダイアログ・ボックスで指定を完了します。
4. このファイルを保管する場所を参照し、「保存」をクリックします。

Cognos TM1 Operations Console 設定ファイルのダウンロードとアップロード


「設定ファイルのアップロード」オプションと「設定ファイルのダウンロード」オプションを使用して、Cognos TM1 Operations Console のセットアップの詳細を保存できます。

手順

1. Cognos TM1 Operations Console の現在の設定を保存するには、「設定ファイル

のダウンロード」  をクリックして、ファイルを任意の場所に保存します。

2. tm1opsconsoleconfig.xml の現在の設定をインストールするには、「設定ファイ

ルのアップロード」  をクリックし、設定ファイルの場所を参照して、「OK」をクリックします。

Watchdog を使用したサーバー・アクティビティの管理

モニターされているサーバー内の特定の状態を識別するための基準セットを Watchdog 機能を使用して設定することにより、識別されたプロセスに対する「強制終了」処理を指定したり、イベントをトレール・ファイルに「記録」したりすることができます。 Watchdog と Logback ユーティリティを使用して、E メール・アラートを送信することもできます。


手順

1. 「Watchdog」タブをクリックします。 ユーザーがモニターしているすべてのサーバーと、セットアップされた対応する Watchdog の状態が表示されます。
2. Watchdog 規則を追加するサーバーの Watchdog グリッド内の行を選択します。
3. Watchdog アラートの詳細を編集するためには、まず作業しているユーザーの管理者状況を検証する必要があります。「検証」をクリックし、このサーバーの管理者ユーザーを表すユーザー名とパスワードを入力します。

要確認: 規則セットアップ領域が見えるようにするために、ウィンドウをドラッグすることが必要な場合もあります。

4. 新しい規則を作成するには、「ルールの追加」  をクリックします。

5. 基準に使用するフィールド（「状態」など）、適用する演算子（「等しい」など）、および Watchdog イベントを発生させる厳密な状態を示す値をそれぞれクリックします。例えば、「状態」が「ビジー」に等しいということを設定できます。フィールドに適切な値であればどれでも使用できます。「状態」フィールドに指定できる設定値は、「アイドル状態」、「実行」、「コミット」、「ロールバック」、「待機」、「ログオン」、および「完了」です。
6. デフォルトでは、基準が満たされたときに実行する「処理」は、「強制終了」に設定されています。この処理を「ログ」に変更して、メッセージをファイルに書き込むようにすることができます。これらのイベントに対応した E メール通知が生成されるように Logback を設定できます。
7. 規則の基準を定義したら、「保存」をクリックします。
8. 規則に関する作業をする場合は、以下のアイコンを使用します。

- 既存の規則の基準を変更するには、「規則の編集」  をクリックします。

- 規則を削除するには、「規則の削除」  をクリックします。

- 表示を最新表示するには、「最新表示」  をクリックします。

9. Watchdog プロセスを実行する「頻度」を設定します。
10. これらのステップを使用して Watchdog を定義したら、**「保存」**をクリックしてこのサーバーの Watchdog を保存します。
11. Watchdog 規則を実施するには、最初の Watchdog ウィンドウで**「開始」**をクリックします。ここで入力した「頻度」に基づいて Watchdog が実行されます。サーバーが規則の基準を満たした場合は、処理が実行されます。
12. Watchdog の実行を停止するには、「停止」をクリックします。

Cognos TM1 Server の場合、サーバー管理者資格情報を持っているいずれかのユーザーが Watchdog を 1 つだけ設定できます。その後、その Watchdog を他のユーザーが使用することができます。サーバーをセットアップしたユーザーがモニター対象サーバーを削除した場合、そのサーバー上で実行されている Watchdog は削除されて実行を停止します。

Watchdog の設定を使用して E メール・アラートを生成する方法については、『Cognos TM1 Operations Console および Logback を使用する Eメールのアラート』を参照してください。

Cognos TM1 Operations Console および Logback を使用する Eメールのアラート

Logback および Watchdog を使用して、サーバーのアクティビティに基づいて Eメール・アラートを送信することができます。

Eメール・アラートを送信するには、まずサーバーの Watchdog 設定を作成します。次に、`tm1_installation_location\bin64\opsconsole\data\logback-sample.xml`

にあるサンプルの logback .XML ファイルを編集して、サーバー、アラートを送信する状況、および使用する E メール・アドレスを識別します。また、ここで説明するように Cognos TM1 アプリケーション・サーバー・ファイルも編集する必要があります。

logback ユーティリティーについては、インターネットで logback を検索して見つかる文書を参照してください。

Logback を使用するための TM1 Applications .bat ファイルの編集

Watchdog 機能での E メール・アラートの使用を開始するには、まず TM1 Applications Server の service_pmpsvc.bat ファイルを編集します。

手順

1. `tm1_installation_location/bin64 service_pmpsvc.bat` を編集して以下の行を追加します。

```
rem Set Logback parameters
set LOGBACK_OPTIONS=-Dlogback.configurationFile=C:/logs/logback.xml
```

こうすることで、Logback 設定ファイルが `c:/logs/logback.xml` として設定されます。

2. 次の行を変更して LOGBACK_OPTIONS を末尾に追加します。

```
"%TOMCAT_EXE%" //IS//"%PLANNING_SERVICE_NAME%"
--StartParams start --StopParams stop --JvmOptions
"%BASE_JVM_OPTIONS%;%EXTRA_JVM_OPTIONS%;%JMX_OPTIONS%;%LOGBACK_OPTIONS%"
```

E メール・アラートのパラメーター

Logback ユーティリティーを使用して、サーバーのアクティビティーに基づいて E メール・アラートを送信することができます。

以下の情報を編集して、E メール・アラートをカスタマイズします。

メッセージ

アラート・メッセージには、メッセージ、ALERT の値を持つマーカー、および出力メッセージのフィルタリングに使用する MDC 値が含まれます。

各ログ・メッセージには、以下のものが含まれています。

```
MDCKEY_TMISERVER = "tm1server";
MDCKEY_ADMINHOST = "adminhost";
MDCKEY_CURRENT = "current";
MDCKEY_LAST = "last";
MDCKEY_ALERTTYPE = "alert_type";
```

フィルター

送信される E メール の数を制限するには、フィルターを使用します。

TM1ThresholdFilter はスレッド、待ちスレッド、および設定したレベルの範囲外のメモリーを処理します。

TM1StatusFilter は表示する、または非表示にするための状況値を設定します。

フィルターをチェーンでつなげることができます。各フィルターは、次の 3 つの値のうちいずれかを返すことができます。

- **ACCEPT**: ログが作成され、次のフィルターには渡されません。
- **DENY**: ログが作成されず、次のフィルターには渡されません。「DenyFilter」は常に DENY を返します。他のすべてのフィルターが NEUTRAL を返し、リストの最後までたどり着くことができるかどうか疑いがある場合それをログ記録しないようにする場合は、DENY をリストの最後に添付することができます。
- **NEUTRAL**: チェーンをさらに先に進みます。すべてのフィルターが NEUTRAL を返す場合、ログ記録されます。

しきい値および状況の両方のフィルターが以下の例のように TM1 サーバーのリストを取ることができます。

```
<tm1server>server name 1</tm1server>  
<tm1server>server name 2</tm1server>
```

管理ホスト

特定の管理ホスト上のすべてのサーバーをモニターする場合は、adminhost を設定します。あるいは、2 つの異なる管理ホスト上に同じ名前のサーバーがあり、そのうち一方のみをモニターする場合は、次のようにします。

```
<adminhost>adminhost 1</adminhost>  
<adminhost>adminhost 2</adminhost>
```

しきい値

リスト上のしきい値のフィルターに値を設定します。NB しきい値は数値である必要があります。

```
<threshold>50</threshold>  
<threshold>100</threshold>
```

しきい値のフィルターには、STATUS 以外の任意の ALERTTYPE 値を設定できます。しきい値はリストにすることができます。これにより、フィルターに複数のしきい値を設定することができます。

方向

デフォルトでは、メッセージは up と down の両方の Direction で作成されます。2 種類の異なるフィルターを連結して使用可能ですが、各フィルターにつき 1 つの方向のみ使用可能です。例えば、1 つは上方向で 50 の位置、もう 1 つは下方向で 40 の位置などです。この結果、しきい値が 50 より上になったり 40 より下になったりするとアラートが送信されます。

```
<direction>up</direction>
```

この例では、サーバー「**実稼働サーバー**」の状況の変更をすべてログ記録し、それ以外のすべてのサーバーの状況の変更はログ記録しません。

```
<filter class="com.ibm.tm1.logging.TM1StatusFilter">  
  <tm1server>Production Server</tm1server>  
  <OnMatch>ACCEPT</OnMatch>  
  <OnMismatch>DENY</OnMismatch>  
</filter>
```

この例は、実行時にログ記録状況が変更されません。

```
<filter class="com.ibm.tml.logging.TM1StatusFilter">
  <status>running</status>
  <OnMatch>DENY</OnMatch>
</filter>
```

状況フィルター

状況フィルターはリストにすることがあります。

```
<status>running</status>
<status>offline</status>
```

OnMatch および **OnMismatch** のいずれも「ACCEPT」、「DENY」、および「NEUTRAL」の値を取ります。各フィルターにつき、いずれか 1 つの状況を設定できます。

例

この例では、スレッド数が 50 の境界を超えてさらに 100 と 150 を超えると、テストおよび実稼働サーバーのメッセージをログ記録します。

```
<filter class="com.ibm.tml.logging.TM1ThresholdFilter">
  <tmlserver>Production Server</tmlserver>
  <tmlserver>Test Server</tmlserver>
  <alerttype>threads</alerttype>
  <threshold>50</threshold>
  <threshold>100</threshold>
  <threshold>150</threshold>
  <direction>up</direction>
</filter>
```

この例は、いずれかのサーバーのメモリー使用量が 256 MB 境界を上回る、または下回ると、メッセージをログ記録します。

```
<filter class="com.ibm.tml.logging.TM1ThresholdFilter">
  <alerttype>memory_usage</alerttype>
  <threshold>256</threshold>
</filter>
```

Logback サンプル・ファイル

以下のサンプル・ファイルは

`tml_installation_location\tml_64\bin64\opsconsole\data` にあります。

E メール・アラートを使用するためには、このファイルを編集する必要があります。このファイルは、出荷時の状態のままでは使用できません。

ファイルを編集するには、以下のように変更します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<configuration>
  <!--
  Example logback configuration file.
  This is a sample only.
  -->

  <appender name="STDOUT"
    class="ch.qos.logback.core.ConsoleAppender">
    <encoder>
      <pattern>%date [%thread] %-5level %logger - %msg%n</pattern>
    </encoder>
  </appender>
```

```

<!--Basic file appender-->
<appender name="FILE"
class="ch.qos.logback.core.FileAppender">
  <encoder>
    <pattern>%date [%thread] %-5level %logger - %msg%n</pattern>
  </encoder>
  <File>sample-log.txt</File>
</appender>

  <!--Daily rolling file appender-->
<appender name="DAILYFILE" class="ch.qos.logback.core.rolling.RollingFileAppender">
<rollingPolicy class="ch.qos.logback.core.rolling.TimeBasedRollingPolicy">
  <FileNamePattern>logFile.%d{yyyy-MM-dd}.log</FileNamePattern>
</rollingPolicy>

  <encoder>
    <pattern>%date [%thread] %-5level %class - %msg%n</pattern>
  </encoder>
</appender>

<!-- a sample email appender -->
<appender name="EMAIL" class="ch.qos.logback.classic.net.SMTPAppender">
  <evaluator class="ch.qos.logback.classic.boolex.OnMarkerEvaluator">
    <marker>NOTIFY_ADMIN</marker>
  <!-- you specify add as many markers as you want -->
  </evaluator>
  <smtpHost>smtp.gmail.com</smtpHost>
  <smtpPort>587</smtpPort>
  <STARTTLS>true</STARTTLS>

  <username>YOUR_GMAIL@gmail.com</username>
  <password>YOUR_GMAIL_PASSWORD</password>
  <to>YOUR_GMAIL@gmail.com</to>
  <from>YOUR_GMAIL@gmail.com</from>
  <subject>Operations Console Alert</subject>

  <layout class="ch.qos.logback.classic.PatternLayout">
    <pattern>%date - %message%n</pattern>  </layout>

    <cyclicBufferTracker class="ch.qos.logback.core.spi.CyclicBufferTrackerImpl">
<!-- send just one log entry per email -->
<bufferSize>1</bufferSize>  </cyclicBufferTracker>
  </appender>

  <!-- ALERT appender which can be used to send alerts
for example if a server starts or stops -->
  <appender name="ALERT"
class="ch.qos.logback.core.ConsoleAppender">

  <!-- TMI event filters -->
  <filter class="com.ibm.tml.logback.filters.TMIThresholdFilter">
  <tmlserver>SERVER_NAME_HERE_IF_LIMITED_TO_A_SERVER</tmlserver>
  <threshold>50</threshold>
  <alerttype>threads</alerttype>
  </filter>
  <filter class="com.ibm.tml.logback.filters.TMIStatusFilter">
  <tmlserver>SERVER_NAME_HERE_IF_LIMITED_TO_A_SERVER</tmlserver>
  <OnMatch>ACCEPT</OnMatch>
  </filter>
  <!-- TMI the deny filter comes at the end of the list -->
  <filter class="com.ibm.tml.logback.filters.DenyFilter">
  </filter>
  <encoder>
    <pattern>%date [%thread] %-5level %logger - %msg%n</pattern>
  </encoder>

```

```

</appender>

<!-- Watchdog trail appender -->
<appender name="WATCHDOGTRAIL" class="ch.qos.logback.core.FileAppender">
  <file>WatchdogActionTrail.log</file>
  <append>true</append>
  <encoder>
    <pattern>%date %-5level %logger - %msg%n</pattern>
  </encoder>
</appender>

<!-- additivity=false ensures watchdog data only goes to the watchdog log file -->
<logger name="watchdog" level="DEBUG" additivity="false">
  <appender-ref ref="WATCHDOGTRAIL"/> <!-- Write watchdog events to a file -->
  <appender-ref ref="EMAIL"/>
<!-- Send watchdog events to the specified email addresses -->
</logger>

<root>
  <level value="debug" />
  <appender-ref ref="FILE" />
</root>
</configuration>

```




Cognos TM1 Operations Console の表示の保存と再ロード


時間を節約するために、モニターの状態を保管して再ロードできます。

タイル表示オプションを使用して、モニターの表示方法を設定します。

Cognos TM1 Operations Console からログアウトした後も残しておきたい情報が表示されるように「モニター」タブをセットアップした後、以下を行います。

手順

1. モニターの現在の状態を保存するには、 をクリックします。
2. 既に保存したモニター状態をロードするには、 をクリックします。 Console ウィンドウに、「保存されたモニター状態が正常にロードされました」と表示されます。
3. モニター状態をクリアするには、 をクリックします。 Console ウィンドウに、「現在のモニター状態が正常に保存されました」と表示されます。

操作ボタン  からモニター状態の保存/クリア/ロードの各オプションをクリックすることもできます。

Cognos TM1 Application サーバーのモニター

Cognos TM1 Applications サーバーのサーバー・アクティビティをモニターできます。

手順

1. Cognos TM1 Operations Console に Cognos TM1 Applications サーバーを追加するには、Cognos TM1 Applications サーバーをリストする操作グループを右クリックします。
2. 「Application Server の追加」を選択します。

3. この Application サーバーを識別するために使用する名前を入力し、「作成」をクリックします。
4. 先ほど追加した名前を右クリックして、「設定」を選択します。
5. そのダイアログ・ボックスのフィールドにすべて入力します。

IP アプリケーション・サーバーの IP アドレスを入力します。「IP」フィールドは、完全修飾ドメイン名でも、NetBIOS 名でも構いません。

コンテキスト

Planning サービスの名前を、例えば pmpsvc のように入力します。

ポート番号:

JVM for TM1 で指定されたポート番号を入力します。このポート番号は、アプリケーション・サーバーの JRE オプションで指定した JMX ポート番号です。

上位の更新期間 (秒)

一般的な更新期間は 2 です。

上位の許容範囲の要因 (秒)

許容範囲を拡大する場合以外は、0 を入力します。

上位のタイムアウト (秒)

一般的なタイムアウト値は 1 です。

6. 「OK」をクリックします。Cognos TM1 Applications サーバーが実行中であれば、ヘルス状況が緑色になり、アクティビティがモニターされます。Cognos TM1 Application サーバーの状況が緑色でない場合は、IBM Cognos Configuration を使用して、サービスが実行中であることを確認してください。
7. ほとんどのユーザーは、TM1 Applications サーバーを安全にモニターするために SSL を使用することを好みます。ただし、SSL を使用せずにモニターすることもできます。これは安全性の低い方式ですが、『TM1 Application サーバーをモニター中の SSL の使用』に記載されている追加の証明書ステップを必要としません。SSL を使用せずに TM1 Application サーバーをモニターするには、次の jvm パラメーターを変更します。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=true
```

これを次のように変更します。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=false
```

8. TM1 Applications サーバーを再始動します。

TM1 Application サーバーをモニター中の SSL の使用

SSL を使用しているときは、以下の追加ステップでアプリケーション・サーバーをモニターします。

SSL を使用するには、Cognos TM1 Application サーバーが稼働しているコンピューターでセキュリティ証明書を作成してから、その証明書を Cognos TM1 Operations Console コンピューターにエクスポートしてから、the Cognos TM1 Operations Console コンピューターを、その新しい証明書ストアを使用するように設定する必要があります。

32 ビット・システムを使用しているか 64 ビット・システムを使用しているかによって、インストールの場所は以下のいずれかになります。

c:\Program Files\ibm\cognos\tm1_64

または

c:\Program Files\ibm\cognos\tm1

JRE ストアが存在する場所は以下のいずれかです。

c:\Program Files\ibm\cognos\tm1_64\bin64\jre\7.0\bin

または

c:\Program Files\ibm\cognos\tm1\bin\jre\7.0\bin

Java 証明書ストアの場所は以下のいずれかです。

c:\Program Files\ibm\cognos\tm1_64\bin64\jre\7.0\lib\security\cacerts

または

c:\Program Files\ibm\cognos\tm1\bin\jre\7.0\lib\security\cacerts

証明書ストアのデフォルトのパスワードは `changeit` です。ご使用の証明書ストアのパスワードを変えてセキュリティー保護した場合は、変更後のパスワードを使用してください。

64 ビット・コンピューターの場合、IBM Cognos Cognos TM1 には 2 つの JRE が添付されます。

- `install_location\bin\jre\7.0\bin`
- `install_location\bin64\jre\7.0\bin`

64 ビット・コンピューターに 2 つの CAcert ストアがあるのはこのためです。64 ビット・インストールはデフォルトで `bin64` ディレクトリー (`install_location\bin64\jre\7.0\bin`) にある JRE を使用して Apache Tomcat を実行します。このため、この手順では、`bin64` ディレクトリーにある証明書ストアに証明書が追加されます。

`installation_location\bin64\jre\7.0\lib\security\cacerts`.

Cognos TM1 Application がここに記載されているとおりに証明書ストアを使用するように構成されていれば、別の場所に証明書を作成することができます。

SSL 証明書の作成

1. TM1 Application サーバーが稼働中の場合は、停止します。
2. 自己署名した証明書を Java ストアに作成するには、次のコマンドを使用します (改行を入れず、32 ビット・コンピューターを使用している場合は、`tm1_64` を `tm1` に置き換えます)。
3.

```
keytool -keystore "c:\Program Files\ibm\cognos\tm1_64\bin64\jre\7.0\lib\security\cacerts"
  -alias jmx -genkey -keyalg RSA -dname "CN=${pki-cn}, OU=${pki-ou}, O=${pki-o}, L=${pki-l}, S=${pki-s}, C=${pki-c}" -storepass changeit -keypass changeit
```

4. ご使用の Cognos TM1 Application サーバーがこの証明書ストアを使用するように設定するには、インストール済み環境に合わせて、以下の Java バージョン管理 (JVM) パラメーターを適宜追加または変更します。
5. `-Djavax.net.ssl.keyStore=jre\7.0\lib\security\cacerts`

注: ここで設定されたポート番号は、プロセスで後ほど Cognos TM1 Application サーバーを TM1 Operations Console で設定するときに使用されます。その設定は、次のようになります。

す。 `-Dcom.sun.management.jmxremote.port=7999`

このファイルで `JMX_OPTIONS` 変数をこれらのパラメーターに更新または追加するには、`bin` または `bin64` ディレクトリーの `service_pmpsvc.bat` というバッチ・ファイルを見つけます。

6. IBM Cognos Configuration から TM1 Application サーバーを再始動して、これらの変更を反映させます。
7. このサーバー・ストアから証明書を、Cognos TM1 Operations Console を実行しているコンピューター (クライアント) にエクスポートします。必要に応じて、`tm1_64` を `tm1` に置き換えます。

```
keytool -export -alias "jmx" -file jmx -keystore "c:\Program Files\ibm\cognos\
tm1_64\bin64\jre\7.0\lib\security\cacerts"
```

8. 鍵ストア・パスワード `changeit` を入力して、現在のディレクトリーに `"jmx"` という証明書ファイルを作成します。
9. サーバーの `jvm` からクライアントの `jvm` に証明書をコピーします。
10. 次のコマンドを使用して、SSL をクライアント (Cognos TM1 Operations Console を実行しているコンピューター) の `CAcert` ストア (必要に応じて `tm1_64` を `tm1` に置き換える) にインポートします。

```
keytool -import -file "jmx" -alias jmx -keystore "c:\Program Files\ibm\cognos\
tm1_64\bin64\jre\7.0\lib\security\cacerts"
```

11. ご使用の Cognos TM1 Application サーバーがこの証明書ストアを使用するように設定するには、インストール済み環境に合わせて、次の JVM パラメーターを適宜追加または変更します。

完全なパスを使用する場合 (`tm1_64` を必要に応じて置き換えます)

```
-Djavax.net.ssl.keyStore=c:\Program Files\ibm\cognos\
tm1_64\bin64\jre\7.0\lib\security\cacerts
```

12. Cognos Configuration から TM1 Application サーバーを再始動します。

前述の指示に従って、Cognos TM1 Application サーバーを Cognos TM1 Operations Console に設定します。

追加の構成情報

Cognos TM1 Application サーバーと Cognos TM1 Operations Console が同一の Tomcat 上にある場合は、証明書ストアへのエクスポートとインポートは必要ありません。証明書を作成するだけで十分です。デフォルトでは、ロードするサーバー証明書を格納した鍵ストア・ファイルのパス名は、ファイル `"keystore"` です。このファイルは、Tomcat を実行しているユーザーのオペレーティング・システムのホーム・ディレクトリーにあります。これは、Cognos TM1 Operations Console を "vanilla" Tomcat から実行している場合のデフォルト・ストアです。JVM パラメー

ター `-Djavax.net.ssl.keyStore=path` を使用して、インポートされた JMX 証明書を使用して証明書を設定します。モニター対象の Cognos TM1 Application サーバーごとに、このパスを設定します。証明書には、例えば、`jmx-frink` のように、毎回異なる別名を使用します。

第 4 章 Cognos TM1 Operations Console の高度なインストール

以下のトピックでは、Cognos TM1 Operations Console をインストールする別の方法について説明しています。

別マシンへの Cognos TM1 Operations Console のインストール

モニター対象のサーバーとは別のマシンに Cognos TM1 Operations Console のみをインストールできます。

手順

1. 通常のプロセスに従って Cognos TM1 をインストールします。ただし、Web コンポーネント・リストから TM1 Operations Console のみを選択します。デフォルトでは、Cognos TM1 Applications Server などのサービスもインストールされます。
2. インストール後、別マシンで TM1 Application サーバーを停止します。
3. `installation_location/webapps/pmpsvc` ディレクトリーと `installation_location/webapps/p2pd` ディレクトリーを削除します。
4. TM1 Application サーバーを再始動します。

Apache Tomcat Web アプリケーション・サーバーの独自インストールと Cognos TM1 Operations Console のインストール

このセクションでは、Cognos TM1 Applications を別のコンピューターにインストールし、Apache Tomcat の独自インストールとともに配布する方法について説明します。

このインストールは、TM1 Admin Server と TM1 Server が別のコンピューターで稼働している環境を対象としています。独自の Web サーバー・ソフトウェアを使用する場合、証明書をインストールして WAR ファイルをデプロイする必要があります。

証明書のインストールについて詳しくは、22 ページの『TM1 Application サーバーをモニター中の SSL の使用』を参照してください。

JRE ユーザー環境変数の確認

Cognos TM1 Operations Console には、classpath ユーザー環境変数の設定が必要です。

Apache Tomcat の独自のインストール環境を使用する場合、JRE パスのための次の Microsoft Windows ユーザー環境変数があることを確認してください。

- 変数名: classpath
- 変数値: `.;C:\Program Files\Java\jre7\bin`

Cognos TM1 インストール環境に付属の Tomcat を使用する場合、この変数は自動的に設定されます。

JRE 鍵ストアへの証明書の追加

IBM Cognos TM1 Operations Console では、Java ランタイム環境 (JRE) 鍵ストアに証明書が必要です。

手順

1. Java keytool コマンドを実行して、証明書を鍵ストアにインポートします。
 - a. コマンド・プロンプトを開き、次のディレクトリに変更します。

```
場所 \bin\jre\7.0\bin
```

場所は、Cognos TM1 がインストールされているファイル・ディレクトリです。

注意:

64 ビット・コンピューターの場合、必ず bin64 フォルダーに証明書を追加してください。

- b. 次のコマンド行を実行します。次に示すコマンドはフォーマットのために改行されていますが、実際にはコマンドすべてを 1 行で入力してください。

```
keytool -import -file "C:\location\bin\ssl\applixca.pem"  
-keystore "C:\location\bin\jre\7.0\lib\security\cacerts"  
-storepass "changeit"
```

64 ビット・インストール環境の場合、証明書を扱う際には 64 ビットのフォルダーがターゲットになります。例えば、このサンプル・コマンドは 64 ビット JRE をターゲットとするものです。

```
cd C:\Program Files\ibm\cognos\TM1_64\bin64\jre\7.0\bin
```

次のコマンドは 64 ビット・システムで使用される例です。ここに示すコマンドはフォーマットのために改行されていますが、実際にはコマンドすべてを 1 行で入力してください。

```
keytool -import -file "C:\Program Files\ibm\cognos\TM1_64\bin64\  
ssl\tm1ca_v2.pem" -keystore "C:\Program Files\ibm\cognos\TM1_64\bin64\  
jre\7.0\lib\security\cacerts" -storepass "changeit"
```

64 ビット・インストール環境を実行する際に、証明書用の 64 ビットの場所が正しくターゲットとして指定されていない場合、サーバーに接続できないという警告メッセージを受け取るようになります。

- c. 証明書を信頼して追加するかどうかを尋ねるプロンプトが出されたら、yes と入力します。

「鍵ストアに証明書が追加されました」というメッセージが表示されます。

2. 変更を有効にするには、Apache Tomcat を再始動することが必要な場合があります。

要確認: Cognos TM1 を再インストールするたびに、証明書を再追加してください。

Cognos TM1 Operations Console の配備

IBM Cognos TM1 Operations Console は、使用を開始する前に Apache Tomcat に配備する必要があります。

始める前に

- Cognos TM1 Operations Console を配備するコンピュータで Apache Tomcat のインスタンスを開始します。
- Apache Tomcat Manager コンソールにアクセスできることを確認します。
- 前に Tomcat Manager を使用したことがなければ、ログインする前に `tomcat-users.xml` ファイルにユーザーとロールを追加します。詳しくは、Apache Tomcat の資料を参照してください。

手順

1. Apache Tomcat が実行されている状態で、「スタート」 > 「プログラム」 > 「Tomcat Manager」とクリックします。Apache Tomcat インスタンスでユーザー名とパスワードが必要とされる場合は、それらを入力します。
2. Tomcat Manager で、「配備」セクションまで下にスクロールし、「WAR ファイルの配備」サブセクションを見つけます。

要確認: Cognos TM1 Operations Console の以前のバージョンが既に配備されている場合、Tomcat Manager で「配備を解除する」オプションを使用して、以前のバージョンの配備を解除します。

3. 「参照」をクリックして、Cognos TM1 Operations Console Web アプリケーションのアーカイブ・ファイルを見つけます。このファイルの標準的な場所は `install_location/webapps/` です。
4. 「OK」をクリックします。
5. Tomcat Manager で「配備」をクリックします。

配備が完了したら、Cognos TM1 Operations Console は、Tomcat Manager の「アプリケーション」セクションに `/tm1operationsconsole` として表示されます。

Cognos TM1 Operations Console 用のユーザー・グループの作成

IBM Cognos TM1 Operations Console では、Cognos TM1 Architect で作成する、指定の Cognos TM1 ユーザー・グループが必要です。

手順

1. Cognos TM1 Architect を実行します。

要確認: TM1 Admin サーバーとモニターするサーバーがまだ開始されていない場合、Cognos TM1 Architect を実行する前に Cognos Configuration を使用して開始してください。

2. Cognos TM1 Architect で、**TM1** をダブルクリックし、実行中の使用可能なサーバーを表示します。

3. モニターするサーバーをダブルクリックし、そのサーバーのためのユーザー名とパスワードでログインします。
4. そのサーバーを右クリックし、「セキュリティ」 > 「クライアントとグループ」を選択して、Cognos TM1 Operations Console 専用の新しいユーザー・グループを追加します。
5. 「グループ」 > 「新規グループの追加」を選択し、monitor などの Cognos TM1 Operations Console グループの識別を容易にするグループ名を入力します。

今追加した新しいグループを見るには、ウィンドウをスクロールすることが必要な場合があります。

6. 「OK」をクリックします。
7. 新しいグループにユーザーを追加するには、以下の手順に従います。

こうして追加したユーザーだけが Cognos TM1 Operations Console にログインできるようになります。

- 管理者タイプのユーザーの場合、新しいグループと共に組み込みの SecurityAdmin グループまたは ADMIN グループ、あるいはその両方に追加します。
- モニターするユーザーを標準ユーザーにする場合、そのユーザーを新しいグループと Cognos TM1 の DataAdmin グループに追加します。

Cognos TM1 でセキュリティ・グループを割り当てることについて詳しくは、「IBM Cognos TM1 操作ガイド」を参照してください。

8. 「OK」をクリックして、Server Explorer に戻ります。Cognos TM1 Architect を閉じることができます。

Cognos TM1 Operations Console の設定

デフォルトでは、Cognos TM1 Operations Console はサンプル管理ホストとして localhost、サーバーとして sdata、および admin というグループを認証に使用するように設定されていて、すぐに稼働できるようになっています。必要に応じて、これらの設定を編集して認証サーバーをカスタマイズすることができます。

手順

1. `http://servername:port number/pmhub/pm/admin` を入力して設定画面を開きます。
2. モニター用のデフォルトの管理ホスト、サーバー、およびグループを変更するには、「**com.ibm.ba.pm.opsconsole.monitor.tm1.TM1OpsConsoleMonitor**」ノードを展開し、
「**com.ibm.ba.pm.opsconsole.monitor.tm1.TM1OpsConsoleMonitor.dictionary**」オプションを選択します。各設定をクリックして、それを変更します。Cognos TM1 Operations Console を Microsoft Internet Explorer 8 で使用する場合は、Microsoft Internet Explorer の文書を参照して、次のように設定にしておいてください。
 - Web ページにアクセスするごとに最新表示をするオプションを有効にします。
 - スクリプト・デバッグのためのオプションは無効にします。

Cognos TM1 Operations Console の開始およびそれへのログイン

IBM Cognos TM1 Operations Console を実行するには、このコンポーネントのポートとサーバー名を識別する URL を入力します。

手順

1. Web ブラウザーで、Web アドレス `http://servername:portnumber/pmhub/pm/opsconsole` を入力します。

説明

- *server_name* は、Cognos TM1 Operations Console および Web アプリケーション・サーバーがインストールされているコンピューターです。Cognos TM1 Application Web を実行している Web サーバーに現在ログオンしている場合、キーワード `localhost` を使用することができます。そうでない場合は、アプリケーションをホスティングする Web サーバーのマシン名、ドメイン名、または IP アドレスを使用できます。
 - *port_number* は、Web アプリケーション・サーバーが稼働しているポート番号です。Cognos TM1 インストールに付属の Apache Tomcat のバージョンの場合、デフォルトのポート番号は 9510 です。別のバージョンの Apache Tomcat の場合、`C:\Program Files\Apache Software Foundation\Tomcat 6.0\conf\` の場所にある Apache Tomcat の `server.xml` ファイルを開いて、ご使用のバージョンの Tomcat が使用するポート設定を判別してください。
2. ログオン・ページで、以下のフィールドに値を入力してから、「**ログオン**」をクリックします。デフォルトのモニター・グループを使用するには、以下を入力します。
 - 管理ホスト: `localhost`
 - サーバー名: `sdata`
 - グループ名: `admin`
 - ユーザー名: `admin`
 - パスワード名: `apple`

Cognos TM1 Operations Console の使用を開始するには、「*IBM Cognos TM1 Operations Console ガイド*」の『IBM Cognos TM1 Operations Console の使用』の章を参照してください。

第 5 章 ユーザー補助機能

ユーザー補助機能は、動作が制限されている方、または視力の限られた方など、身体の不自由な方に情報技術製品をご使用いただけるように支援します。

キーボード・ショートカット

アプリケーション固有のキーに加えて、Microsoft Windows の標準ナビゲーション・キーが使用されます。

キーボード・ショートカットを使用して、アプリケーション内を移動し、タスクを実行できます。スクリーン・リーダーを使用している場合は、ウィンドウを最大化して、キーボード・ショートカット・テーブルを完全に拡張表示してアクセスできるようにするとよいでしょう。

注: 次のキーボード・ショートカットは、米国の標準キーボードに基づいています。

表 2. キーボード・ショートカット

操作	ショートカット・キー
アクティブなコマンド・ボタンのコマンドを実行する。	Enter
閉じることができるオブジェクトまたはウィンドウを閉じる。	Ctrl+W
最初のアイテムまたはオブジェクトに移動する; ホームに移動する。	Home
最後のアイテムまたはオブジェクトに移動する; 最後に移動する。	End
アプリケーションの次のウィンドウに進む。	F8
アプリケーションの前のウィンドウに戻る。	Shift+F8
アプリケーション・バーにフォーカスを移動する (青いドット)。	Alt+F10
同じレベルのタブ・インデックス順序の次のアイテムに移動する; 最後に到達したら、最初のタブ・インデックスに循環する。	Tab
同じレベルのタブ・インデックス順序の前のアイテムに移動する; 先頭に到達したら、最後のタブ・インデックスに循環する。	Shift+Tab
オン/オフを切り替える。	スペース・バー
次のオプション・ボタンに移動して選択する。	右矢印、下矢印
前のオプション・ボタンに移動して選択する。	上矢印、左矢印
ドロップダウン・リストのコンテンツを開いて表示する。	下矢印

表2. キーボード・ショートカット (続き)

操作	ショートカット・キー
開いているドロップダウン・リストを閉じる。	Esc
現在のノードの次の選択可能ノードに移動する。 選択したノードに下位ノードがあり、それが展開している場合、最初の下位ノードに移動する。	下矢印
前の選択可能ノードに移動する。	上矢印
現在の選択を展開する (展開されていない場合)。ノードが展開されている場合、最初の下位ノードに移動する。	右矢印および正符号
現在の選択を省略する (展開されている場合)。ノードが省略されている場合、現在の選択の上にある親ノードに移動する。	左矢印および負符号
子メニュー項目を展開する。	右矢印
子メニュー項目を省略する。	左矢印
コンテキスト・メニューを開く。	キーを右クリック (Mozilla Firefox の場合)、または Shift+F10 (Microsoft Internet Explorer の場合)
開いているコンテキスト・メニューを閉じる。	Esc
スクロールダウンする。	下矢印またはページダウン
スクロールアップする。	上矢印またはページアップ
キャンバス内で同じレベルのタブ・インデックス順序の次のウィジェットに移動する。	Tab
キャンバス内で同じレベルのタブ・インデックス順序の前のウィジェットに移動する。	Shift+Tab
データベース・インスタンスを追加する。	Alt+N
設定ファイルをアップロードする。	Alt+U
設定ファイルをダウンロードする。	Alt+I
上下にタイル表示する。	Alt+Q
左右にタイル表示する。	Alt+W
ボックスでタイル表示する。	Alt+P
ツリーを更新する。	Alt+R

IBM とアクセシビリティ

ユーザー補助機能に対する IBM の取り組みの詳細については、IBM アクセシビリティ・センターを参照してください。

IBM アクセシビリティ・センター(www.ibm.com/able)

特記事項

本書は IBM が世界各国で提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。本書には、お客様が購入されたプログラムまたはライセンス資格に含まれない製品、サービス、または機能に関する説明が含まれる場合があります。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Software Group
Attention: Licensing
3755 Riverside Dr
Ottawa, ON K1V 1B7
Canada

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

- Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。
- Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。
- UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。
- Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft 製品のスクリーン・ショットは Microsoft の許可を得て使用しています。



索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ 33, 34
 キーボード・ショートカット 33
アップグレード 3
アプリケーション・サーバー 22
オブジェクト競合 9

[カ行]

管理者アクセスの検証 7
管理ホスト 7
キーボード・ショートカット
 アクセシビリティ 33

[サ行]

サーバー E メール・アラート・パラメーター 16, 17
サーバーの追加 7
サンドボックス 9
数値パラメーター 12
設定のアップロード 15
設定のダウンロード 15
操作グループ 7
操作コンソール 22

[タ行]

ディスクにログ記録 11, 14, 15

[ナ行]

日課のモニター 9

[ハ行]

配備
 TM1 Operations Console 4, 29
パフォーマンス統計 10
別マシンへの TM1 Operations Console のインストール 27
ヘルス状況 8

[マ行]

モニター 9
モニター状態の永続化 21
モニター状態のクリア 21
モニター状態の保存 21
モニター状態のロード 21

[ヤ行]

ユーザー名の表示 8

[ラ行]

ログインする 5, 31
ログ記録 13
ログのダウンロード 15
ログの表示 14

[数字]

64 ビット・システム・コマンド 28
9.5.2 サーバーのモニター 3

C

classpath 27
Cognos TM1 Operations Console 28

L

logback サンプル・ファイル 19

M

MaskUserNameInServerTools パラメーター 8

T

TM1 Applications Server 2, 21
TM1 Operations Console 5, 15, 31
 インストール 3
 開始 4
 証明書の追加 28
 ユーザー・グループの作成 29
TM1 Operations Console での日課のモニター 11
TM1 Operations Console のウィンドウ 1
TM1 Operations Console の「ディスクにログ記録」 2
TM1 Operations Console のパフォーマンス統計 2

TM1 Operations Console のモニター状態の保存 1
TM1 Operations Console 用のユーザー・グループ 29
tm1opsconsoleconfig.xml 15
TurboIntegrator プロセスのモニター 9, 10

W

Watchdog 15
Watchdog 編集 17